

路上生活者の個人史

第3回

竹中尚文

I

今回は路上生活者のインタビューを掲載することが出来なかった。これまで路上生活者の食糧支援等をおこなってから、聞き取りをさせてもらっていた。この約一年間はコロナ禍の中で「密閉・密集・密接」を避けることがその対策となってきた。長時間にわたるインタビューは密接になるため、控えてきた。これまでは以前に収録したものを編集して掲載してきたが、ついにその撮り溜めがなくなった。

そこで今回は、路上生活者を援助する側の私たちの概要を述べたい。まず、私は路上生活者から「ありがとう」と言われる。私も「ありがとう」と返答する。援助を受けてくれる人が来てくれるから、援助を提供できると思うから、「ありがとう」と返答をする。これは私の基本姿勢である。

II

私たちは、大阪市北区にある扇町公園で路上生活者の食糧支援を一ヶ月に一回している。具体的には私が住職をしている専光寺で「いなり寿司」を作って扇町公園に運んで配布している。この扇町公園で路上生活者の支援をするボランティアは、個人の集まりである。この中に組織として参加するのは私たちだけである。多くのボランティアの人たちは月曜日ごとに活動している。

ボランティア活動の中心は食糧支援である。ここに並ぶ路上生活者は50人から100人ほどで、私たち専光寺は10キロ余りのお米を4~500個の「いなり寿司」にして配布している。この「いなり寿司」を調理するのは、専光寺仏教婦人会の人々である。お寺に婦人会という組織があって、その活動の一つにしている。私たちが参加しない回は、ボランティアの人

たちが白米による「おにぎり」を作って配布している。このお米も毎回 10 キロ余りだから、月間 4 回で 4~50 キロが必要になる。年間 500 キロほどのお米であるが、以前は廃棄するような粗悪米を使っていた。一年以上経過した古いお米で、その保管状態も悪いので、とても不味い「おにぎり」を提供していた。お米は私が調達することにした。

拙寺は年間 300 キロほどの「おぶっぼん仏飯」(仏様にお供えするご飯)用のお米が集まる。仏様にお供えするには多すぎるお米の量なので、経済的困難の中で子育てをしている家庭に支援米として送ることにした。そうしたら、お寺の門信徒の方々は多くお米を持ってきてくれるようになった。いつの間にかお米は年間 600 キロほどになった。少しずつの厚意が倍のお米になった。それも美味しいお米が集まるようになった。こうした人々の厚意に触発された私は、お米専用の冷蔵庫を買った。冷蔵庫で保管するとお米は美味しい状態が保たれる。

冷蔵庫の収納量は約 1 トンであるから、子育て支援のお米も路上生活者用のお米もなんとか収納可能である。必要なお米は年間 1,200 キロ程

であるが、毎月 100 キロ程のお米を消費するので、工夫をしてお米を消費していくと 1,000 キロ収納の冷蔵庫で問題はない。問題は、路上生活者の 500 キロほどのお米をどうするか、私には調達する見込みはなかった。

多くの人にお米の提供をお願いした。知り合いのお寺に声をかけるうちに、本願寺が全国の宗派内のお寺にその声を拡散してくれた。いろいろな方の力で、それなりの量のお米が集まるようになった。この一年は、コロナ禍でどこのお寺も人が集まりにくくなったので、「これまでのようにお米を提供できない」という声を聞くようになった。どうしようと思っていたら、私が直接知らない人までもが「お米が余っていたら、専光寺に送ってやってくれ」と声をかけてくれた。何十キロも送ってくれる人もあれば、数キロを送ってくれる人もある。量の多少は問題ではない。いろいろな人が無理をしない量のお米をくださるのがとっても嬉しい。

お米の他にも、不要になった固形石鹸や髭剃りもお願いしている。固形石鹸は、路上生活者には必須アイテムである。固形石鹸は身体も衣類も洗うことができる。その上、持ち運びに便利な物である。この一年余り

の間、旅行に出かける人がほとんどいなくなった。お土産だといって、宿で使わずに持ち帰った石鹸や髭剃りをいただくことがなくなった。

この読者で、お米が余っていたり、不要な固形石鹸や髭剃りがあつたりする方は、専光寺に送っていただきたい。応じていただける方は、まずメールでご連絡をください。

(senkoji@leaf.ocn.ne.jp)

III

私たちは食糧支援の活動を単独でやっているのではない。「扇町公園炊き出しの会」の活動に参加している。この会は、個人として参加している人たちが中心で、団体として参加しているのは、私たちだけである。

「扇町公園炊き出しの会」は毎週月曜日の 20 時から、扇町公園の東南の角で食糧支援などをおこなっている。基本的に第 4 月曜は私たちが「いなり寿司」を配布する。第 1 週から第 3 週の月曜は、「おにぎり」を配布している。食糧支援のほかに、衣類や寒冷期には寝袋の配布をしている。他に、石鹸やひげ剃りなどの日用品の配布もしている。月に一回程度、ボランティア医師による医療相談を受けつけている。行政書士が各種の申請

についての相談に応じ、調理人がキッチンカーを横付けして温かい食事を振る舞うこともある。

この会は、それぞれの人が自分にできることをする。会長に申告して、何らかの援助活動をする。書面等で入会するようなことはなく、自分のやりたいことを会長に伝えて実践する。会長は私たちが平成 25(2013)年末に参加したときに、会長として紹介された。私はこの会長がどうやって決まったかも知らないし、この 8 年の間に会長選出の経緯も知らないし、知りたいとも思わなかった。この人が会長であることに特に不都合を感じたこともない。

この会の始まりは昭和 55(1980)年頃と聞いている。カソリックのシスターが大阪駅前路上生活者に「おにぎり」を配り始めたようだ。それに賛同した人たちが手伝うようになり、シスターは教会の移動で大阪を離れられた。手伝っていた人たちがその活動を引き継いで、「おにぎり」を作り続けた。手伝いの人たちの多くはキリスト教徒であり、「おにぎり」を作る場所も教会が提供してきた。平成 29(2017)年に活動の場所を、大阪駅前から 1 km あまり東の扇町公園に移した。平成 30(2018)年にはキリス

ト教徒の人たちが、高齢化を理由にボランティア活動から引退した。さらに令和元(2019)年4月には「おにぎり」を作る場所を提供していた教会で牧師不在になったので台所を使えなくなった。私たちの専光寺は、月に1回「いなり寿司」を作るだけであるが、月に3回「おにぎり」を作るキリスト教徒とその場所がなくなるのは「扇町公園炊き出しの会」としては大きな痛手だった。会長が奔走して調理場を貸していただける所をさがしてきた。

「扇町公園炊き出しの会」の活動においても、キリスト教徒の高齢化と宗教者の減少が顕著になった。これはキリスト教の衰退だけを表しているのではない。宗教そのものの衰退である。どの宗教も信者の高齢化と減少に直面している。それは経済力の減衰となり、専従の宗教者の減少となっている。宗教に無関心な人たちは、宗教に魅力がなくなったからだという。

日本でもアメリカでも宗教が社会の中で縮小している。それは、宗教を経済的に支えてきた中間層の減少によるものである。経済成長期には中間層も厚く、というより中間層が多数いることが経済成長の大きな要因

でもあった。そして今、中間層の減少が宗教に大きな経済的打撃を与えている。

日本の場合、経済成長期は20世紀後半のことだった。第2次世界大戦以前は、中間層はあまり厚くなかった。19世紀以前はもっと中間層は少なかったが、宗教はしっかり存在していた。それは、経済的強者、すなわち富める者による支えが大きかった。ノブレス・オブリージュ(noblesse oblige : 高貴な者は義務をとמונאו、というような意)などというフランス語を持ち出さなくても、日本の社会には旦那がいた。裕福な者は、地域社会や宗教の経済的な支えをしたものだった。そういう人を旦那と呼んだ。旦那の語源は、ダーナ(dāna)というサンスクリット語・パーリ語である。

「布施」とか「喜捨」という意味である。古代インドでは、富や徳を持つ者を長者と呼んだ。長者が布施(dāna)をするのである。日本では、そうした人を旦那と呼んだ。

今、旦那は少なくなり、^{ほうかん} 幫間ばかりが目につくようになった。